

---

# 魔法

あきくん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法

### 【Nコード】

N8265C

### 【作者名】

あきくん

### 【あらすじ】

SFとはわたしにとっては“少し不思議”の略のことです。なので何でもあります。この話は変な自称魔法と、魔法について考えようとする、そんな感じになっています。

## 魔法

わたしはちよつと考えてみた。

何って？ それは魔法つてもものについてだよ。

はいそこ、笑

わない！ ちゃんと理由があるんだからね。

その理由とは、いや理由というかきつかけだけど、こんな話があるからだ。

とある日、とある放課後の学校。その学校に通う二人の人間の姿があった。

厳密にはもうちよつと前から二人の物語は始まっているんだけど、まあわたしには必要ないからいいや。それと、設定がアバウトな気がするけどそれが必要なとこだけピックアップした結果つてことので。。。

「よく見てろよ。今からこの扉の鍵をあけて見せるからな」

「ふーん。。。いきなりこんなとこに呼び出してそれだけなの？

ドロボウの練習だったら一人でやってよ。。。」

さて、この物語は主要登場人物以外の他に、人影も見られないところでのこんな会話から始まる。

正確な場所は、理科室内の黒板の横にある、理科準備室への扉の前。

そしてここにいるのは男女一人ずつ。見た目が将来有望そうな少年と、平たんな体つきの小柄な女の子だ。

少年のほうはいかにも自信ありげな感じをその態度で示しているが、女の子のほうはちよつと不機嫌そうに腰に手を当てている。でも女の子の態度もうなずける。あえて何がとはいわないけど、女の子としては少し期待はずれだったのだから。もちろん気が有るか無いかは別にしてだ。

少年はそんな女の子の態度に全然気づいていないはず、だと思つよわたしは。男なんてそんなもんだし、次の台詞でわかる様に、実際少年くんだって、女の子の言葉にしか反応してないわけだし。「違つて！ 魔法だよ魔法！ 今からぼくの魔法でこの鍵を開けようって言ってるの」

・・・ふうん。そうなんだ。

ということはこの場所を選んだのはきつと、理科準備室には確実に鍵がかかっているからだね。だったら別にほかの場所でもよかつたんじゃないか、なんて意見もありそうだけど、それは少年くんについてね。選んだのは彼なんだから。

ちなみにここでは少し時間が空いている。

その間、無意識のうちに大事な所をスルーしているわたしがいるわけだけど、しょうがないじゃない。だっていうにつけて魔法だよ女の子だって固まっているんだから。でも、その理由は実はわたしとは違つたんだよ。

ともかく扉の鍵を少年は魔法で開けてやろうというのだ。魔法はファンタジーな話で、この世界はあくまで平々凡々なところだというのが通説だというのに。言ってしまうえば非常識、もしくはまだ子供だつてことだろうか、そう考えるのが普通だし、わたしもこれには実際そう思つた。

「へー・・・。ほんとに？ 普段もだけど一段と面白いこと言うね」  
思い出したかのように言葉を発する女の子。このにつこりとした言い方は、本気で言ってるのかとげがあるのか、いまいちわかりにくい。

「いいから見てる」

「まって、一応・・・」

そう少年を制止させる女の子。いったい何をするのかと思つたら、カッ。カッ。

ちゃんと鍵がかかっていることを確認。結構楽しんでるね、この子は。

「もういいな・・・」

言つと少年はこぶしを握り締め、おもむろにドアノブを殴り始める。

ゴッ！ ゴッ！ ゴー！

うん。結構力入ってる。

「開け！ 開け！」

これがいわゆる呪文の詠唱というやつかな・・・？ ……いや違うか。

ガッ！ ガッ！ ゴッ！ ゴッ！

「まだまだ！！」

ゴッ！ ゴッ！ ガッ！

扉が軋む。

「くっ！ たあ！ まだかつ！」

ガッ！ ゴッ！

っておい！

「ちょっと、何やってるの！ そんなことしたら壊れちゃうじゃない。力ずくと魔法は違うんだよ？」

女の子はここで男を止めにかかるわけだけど、その目は哀れみを感じているような気が・・・。ぶっちゃけ、かわいそうな子だと思っっているんだろうな。期待して見てこれじゃ、しょうがないけど。でも少年はひるむ様子も見せない。

「これは魔法力を鍵に叩き込んでるんだ！ もうすぐ開くからなるほどそういう理屈なんだ！」

ゴッ！ ガッ！ ガッ！ ガギヨン！

「ほら！」

一応いっとくと最後の変な擬音、鍵開いた音ね。嘘っぽいけどほんとに開いたんだ。

「・・・何かすつきりしないね」

鍵の開いた扉を無意味に開け閉めしながらの女の子の一言。わたしも同感だよ。

あきれているというか、見てはいけないものを見た感じというか、女の子は言葉どおりすつきりしない視線を床板と床板の間の筋に向けている。

魔法というわりに感動がない。正直そう思うよ。そうそう、ちなみに理科室の入り口は木の引き戸で、理科準備室は鍵つきの木製扉、それで床は木の板。これでわかる様にこの学校は少し古めなんだ。・ ・ ・何？ わたしは何で必要ない説明をしてるんだろう。ははっ ・ ・ ・、これが少年くんの魔法の効果だったりして ・ ・ ・

「何言ってるんだよ。魔法ってそういうもんなんだよ。きつと」

「でもすごいだろ！ 鍵開いたんだから、少しは驚いてよ！ きみだから見せたんだから！」

こぶしを握り締めすぐに息を吹き返した。若いね。

しかし、きみだから見せた、つてのはどういう意味なんだろう。まさか惚れてるとか、いやいやただ親友だから、それとも反応がよさそうだったから、話しやすいやつだから ・ ・ ・。やっぱり一押しは最初のかな？ ・ ・ ・やめやめ！ 色恋沙汰を混ぜると話が長くなる。おいしいけど今は必要のないところだから省こう。

ともかく、こうして少年は鍵を自称魔法で開けたわけだ。それは素直にすごいと思う。でも、と同時にこれが魔法なのだろうかと疑問が残る。ここでほんの少しだけ、わたしは魔法について考えることになったんだよ。

さて、物語を進めよう。机の上には理科準備室から勝手に持ち出したアルコールランプがある。持ってきたのは女の子で、ガラス製のふたを取ると少年のほうを真顔で向く。

「あたしも魔法見せてあげるよ」  
はっ？

わたしは一瞬ひるんだけど驚きはしなかった。少年くんが自称魔法を見せた後では、ここまでは許容範囲だったんだから。ここまでは ・ ・ ・

思えば、これが少年くんが魔法言い出したときに間を空けた理由だったんだよ。あんたも魔法使えるのかっていう軽い驚きみたいなのでも類は友を呼ぶっていうのは本当なんだね……。

女の子はアルコールランプに手をかざす。そして、この流れでいくとおもいつきりひっぱたくかと思ったら、ちょっと違うようで女の子は空中で手を止めた。

「火よ！」

女の子の澄んだ声が心地いい。そして、実に魔法っぽいじゃないか。しかしそう感心したのもつかの間。と共に、わたしの許容範囲を軽く飛び越える、すさまじいエフェクトが巻き起こったのだった。具体的には次のようになった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……！

突然にして、空が鳴りはじめ暗雲がたちこめ、

「火よ点け。火よ、火よ……」

と同時に空気が震撼し、棚に陳列された薬品類や実験器具がガタガタとゆれ始める。

「火よ……、点け、点け点け……。火よ……」

トランス状態に入ったのか、女の子もぶつぶつと呟きながら小刻みに揺れ始め、見た目ちよつと怖い。

その上、ピカピカと稲光が走り、それが蛍光灯のチカチカとした点滅と合いまり、もう明るいんだか暗いんだか……。

ついには窓を閉め切っているのに風を感じる始末だし、いったいどうなってるのよ。

ガタ！ ガタガタ……。ドドドド……。

よくわからない効果音まで聞こえてくるし、周りほとんどん派手に、そして激しくなっていく。

バガツ！ バタンツ！

衝撃に耐えられなくなったのか、突然冷蔵庫が開いた音だ。次の瞬間には閉まつたけど、人体模型の足が入ってたのがチラツと見えただよ！ だれ、そんなの入れたの！

いやいや、女の子を中心に置いたすさまじい音と光の世界じゃないの。むりもないけど少年くんだって肝心のアルコーランプより、ド派手な周りが気になってしょうがない様子だよ。

「火よ……」  
ポツ。

あつ！ 火が点いた。あまりにもさりげなくて、少年くんは見えないけど。

「ふう……」

女の子がかわいく息を吐き出すと、嘘のように、静まり返った教室に戻った。

「どう？ 点いたでしょ」

こうして何事もなかったかのように、少年に女の子が笑顔を向けたんだよ。

「……大丈夫なの？ なんか震えてたけど」

そしてこれが少年の第一声。優しい言葉のようで、実は女の子の様子を探っていると見たね、わたしは。

「ん？ あたし？ 大丈夫だよ。意識はあるし、魔法なんだからあのくらいね……」

そう女の子は笑うけど、やっぱり少年くんのとくと一緒になんかね……。

「なんかすつきりしないね……」

そうなんだよ。わたしの心を代弁したかのように少年くんが言ったわけだけど、それはしょぼいことするわりに効率が悪過ぎるからかな……。他の部分のほう明らかに大量のエネルギー使ってるし、それより何より火が点いたことはすごいにはすごいけど、魔法ってこういうもんなのかって疑問もやっぱり残るし……。

結局二人とも毛色が違う感じでさ、しかもわたしの思う魔法とはなんか違うような気がするし、なのにどっちも魔法っていったい魔法って何なんだ、ってこれで思ったんだよ。

それで、

「先生ちよつと違うと思うな。地味な力技も派手なエフェクトも、肝心な部分がおかしいじゃない」

なんて感じて新人の超絶かわいい教師が現れて、魔法部を作ろう、なんておかしな話になっていくんだけど……。

それはそれ！

ともかく、これがわたしが魔法について考えることになった理由なんだよ。

理論的に体系化された学問のようなものを魔法というのか、それとも不思議な理解できないこと全般を魔法というのか。よく考えると、魔法つてもものを捉えようとしている時点で何かないとおかしいわけで、そうなると前者に近いような……。

でもそう考えていくと、現象そのものじゃなくて現象の捉え方のひとつなのかな、なんてどこまでも答えが出ないような気が……。それって結局、言ったもん勝ちなんじゃないかと……。

いやあ、考えるだけ無駄だったかな？

ああ、おちがない……。

実は最初っからおちだったりして……。

了

(後書き)

20071009

貴重な時間を削って読んでいただきまして、ありがとうございました。

魔法について意味もなく考えていたら、こんな話になりました。わたしの考えをすべて入れるには全然足りませんが、小説として表すとこんな感じです。もちろん小説ですから、これがわたしの意見そのものではなく登場人物の意見です。妙なことを考えてるな、と笑ってやってください。

文章ですけど、回想のようで現在進行形のような、変な作りになっています。書きやすかったというのもあつてなぜかこうなつたんですけど、それだけ衝撃的な出来事について考えようとしている、ということにしておいてください。それと、誰が語ってるんだ、というのは特に気にしないでいいです。

それにしても、解らないことをただ考えているって楽しいです。時間ももつたないけど・・・ってわたしだけじゃないですよ。ともあれ、感想を頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8265c/>

---

魔法

2010年10月8日15時19分発行